

(研究ノート)

シモーヌ・ヴェイユとドストエフスキー

杉本京子

Simone Weil and Dostoïevski

Kyoko Sugimoto

19世紀後半のロシア（国内の皇帝独裁と西ヨーロッパに押し寄せる社会主義革命の波の時代）の作家と20世紀前半のヨーロッパ（革命後一大勢力となったソ連共産主義、ドイツ国家主義、自由主義即帝国主義の三つの勢力が拮抗する不安定な時代）の思想家を比較するのは容易ではないが、ドストエフスキーとシモーヌ・ヴェイユの間には、いくつかの共通要素が見られる。

実際、両者を比較した論考がすでにある。（例えば、「罪と罰」と「神への愛と不幸」を比較して、両者がこの世とあの世、自然的世界と超自然的世界という二元的見地を共有していることを指摘したKatherine BRUECKの「Simone Weil et Dostoïevsky-une lecture de Crime et Châtiment à la lumière du dualisme weilien」CSW3 1985 p273）

あるいは、ドストエフスキーの作品分析から、不幸、重力、悪の観念などが両者において類似しているのを示し、かつ、キリスト観の相違を指摘したSophie OLLIVIERの「Le problème du mal chez Simone Weil et Dostoïevski」CSW4 1995

また、「カラゾフの兄弟」6編3のゾシマ長老の教えにおける友愛や平等という考え、「他の世界とのつながり」という神秘的感覚に、ヴェイユとの共通点を指摘する論考Jane DOERING「Déclarations des droits et des devoirs」CSW3 2003）

ドストエフスキーとヴェイユとの共通点とは、貧困や屈辱に苦しむ人々の「不幸」への痛ましいまでの共感、ローマ・カトリック教会への批判、無神論的社会主義への不信、精神性に根ざした新しい文明のあり方への希求（ドストエフスキーの場合それはギリシャ正教を基盤とするロシア民衆の文化であり、ヴェイユの場合は労働の精神性に基づく新しい文明である）などである。

だが、ヴェイユがドストエフスキーに言及した例はごく限られており、「カラマゾフの兄弟」のイワンの言葉がその思考の対象となっているのみである。

実際のところヴェイユはどの程度ドストエフスキーを読んでいたのだろうか。

ペトルマンの伝えるところによると、シモーヌが12歳の夏（彼女は既にパスカルを読んでいた）のある日、昼食に遅れてきたという。「罪と罰」を読みふけていたためである。（「シモー

ヌ・ヴェイユの生涯」)

このエピソードはシモーヌの知的早熟と神の問題への関心を示すだけでなく、当時のフランスにおけるドストエフスキー文学の紹介という事実を反映している。(ちなみにジッドは1911年に「カラマーゾフの兄弟」についての論文を発表しており、それによればロシア文学がフランスに紹介されたのは1890年代である。)

ドストエフスキーの直接の影響がヴェイユの著作に顕著に見られることはないにしても、少なくともイワンの言葉に触発されたと思われる彼女の思考がその著作中に散見するのは間違いのないことである。(「自由と地上のパン」の問題、贖われぬ不合理な苦しみ、犠牲の観念など)

キリスト教と社会主義という人類の理想の、今日ではもはや形骸化したかのような二つの思潮を前にしたドストエフスキーのテーマを先鋭化して継承し、なによりも現実化したのが、ヴェイユの思想と生涯だったのではないだろうか。

本論ではイワンの言葉のヴェイユによる解釈と反論を検討することで、ヴェイユの神の観念の特徴を明らかにすることから始める。

イワンの言葉の検討に入る前に、ヴェイユの宗教思想の本質を見ておこう。それは次のように簡潔に示されている。(A Dp132)

「(この世に) 純粋な善はどこにもない。ということは、神が全能でない、神が絶対的に善でない、神が命令する力を持つところならどこでも命令するということではない、のいずれかである。～創造は神の方から見ると自己拡張の行為ではなく、退却、放棄の行為である。～私たち自身を否定するようにキリストが教えたのと同じように、神は創造の行為によって神自身を否定した。神は私たちが神のために自分を否定する可能性を与えるために神自身を否定したのだ。～神の自己放棄、自ら距離をおくことと姿を消すこと、外見上は不在でありこの世においては目に見えぬ形で密かに現存すること、そのような考えを持つのが本当の宗教である。～命令する権能を持つところではどこでも命令するものとして神性を思い描く宗教は偽りである。」

ここから理解できるようにヴェイユは、世界の創造は神による自己放棄の行為であり、それが悪の起源であると考えているのである。

この考えを同時期に書かれたノートからさらに詳しく見ていく。

ナチス占領下のパリを脱してマルセイユに一時滞在したシモーヌ・ヴェイユは、この時期のノートの中で(カイエ6、7、8)ドストエフスキーの「カラマーゾフの兄弟」第二部5編4－『反抗』のイワンの言葉について言及し、その無神論的ヒューマニズムに批判的解釈を施し、独自の神義論を展開させている。

その神義論は、ヴェイユの宗教思想の核であり、「カラマーゾフの兄弟」への言及が集中しているカイエ6のms135～ms142(OCSW6-2 p393～399)では、神への愛、神性を捨てること、不幸、隣人への愛というヴェイユの宗教思想の中心的テーマが、繰り返し関連させて述べられている。

(イワンについてはその他、カイエ 7 ms 4 (OCSW6-2 p415) とカイエ 8 ms97 (OCSW6-3 p119) があるのみである。)

ヴェイユのイワン批判についてヴェイユがどのようにしてイワンの無神論の克服(正確にはイワンは完全な無神論者とは考えられないので、世界の意味を否定することの克服というべきだか)を試みたかを明らかにしていこう。

イワンの反抗が問題とされるのは、次の4つの点においてである。

- 1) 人間の不幸を根拠とする神への反抗は、神の全能を前提としており、さらにそれは人間の偽りの神性と結びついている。ヴェイユの神の概念は「無力な神」、全能であることを放棄した神である。
- 2) 不幸を理由として神に反抗するのではなく、不幸を受けいれるべきである。なぜなら神みづから全能であることを放棄し、悪に対してそれが存在しないように関与することはしないのだから。だがこの神は不幸を共に苦しむ神であり、憐みの神である。
- 3) ヴェイユにおいて自己の不幸と他者の不幸との峻厳な区別がなされていることに着目し、自己と他者を繋ぐ神という観念を引き出すことができる。
- 4) 不幸を理由とする反抗は、不幸から注意をそらすことである。「注意」は、ヴェイユにおいては、自己と他者を繋ぐ、人間の特別な態度である。

1) 無力な神

カイエ 6 p395 (OCSW6-2) Aimer Dieu impuissant (無力な神を愛すること) Nous devons vider~c'est se présenter comme un souverain. 神への愛をテーマとする断章において、ヴェイユはイワンを例に挙げ、「人間の不幸を理由として神に反抗することは、神を一種の権力者のように思い描くことだ。」と記す。さらにms137Se présenter Dieu tout-puissant, c'est se présenter soi-même dans l'état de fausse divinité. 「神を全能な存在として思い描くことは、自分自身をも偽りの神性の状態に置くことだ。」

ヴェイユによれば、神と一致するとは、神性を捨てた神と結びつくことであり、神性を捨てることは、全能であることを放棄することである。このような神の概念、Dieu dépouillé de sa divinité, Dieu impuissantは、ヴェイユの宗教性の中心的観念であり、旧約時代のイスラエルおよび古代ローマ帝国の国教となったカトリックへの批判の根拠である。

では神の無力 (Impuissance de Dieu) は何に因るのだろうか。

カイエ 5 p267ms16 (OCSW6-2) Impuissance de Dieu.

Dieu n'exerce pas sa toute-puissance; s'il l'exerçait, nous n'existerions pas, ni rien. 私たちが存在するために神は全能であることを控え、必然に服している。さらにカイエ10 p251 ms 4~5 (OCSW6-3) において、神が全能を限定するのは叡知すなわち愛によるものであるとする考えが示される。(La sagesse est amour. Dieu, par amour, limite sa puissance.

Dieu est à la fois tout-puissance et complètement impuissance. 愛とは、あるものが存在することを愛するのであり、そこに手を加えようとは望まないことである。神はこのように私たちを愛するのであり、そうでないなら私たちは存在しなくなるであろう。

人間の自由を保証するために神は全能であることを放棄したというのである。

そしてヴェイユによれば、神にたいする人間の側の愛は、「存在しないことを受け入れること」である。

カイエ6 p403ms147~148 (OCSW6-2) 神が存在するという事は、私が存在しないということであり、この認識は苦しみと死によってのみ私たちの感覚のなかに広がっていく。苦しみの意味はここにある。一度それを認識したら、すべての努力の目的は「無」になることである。

さらにカイエ10 p251ms5 (OCSW6-3)

Consentir par amour à ne plus être, comme nous devons faire, n'est pas anéantissement, mais transport vertical dans la réalité supérieure à être. に示されるような「愛によって、存在しないことに同意すること」である。

ヴェイユによれば無辜の苦しみを論拠とする神への反抗には意味がなく、無辜の苦しみを苦しみのままに存在させている無力な神を愛することが必要なのである。なぜなら報いも慰めも意味づけもない苦しみこそ意味のある苦しみであり、徹底した真の苦しみにによってこそ人は本来あるべき自己無化に向かうことができるのだから。

2) ともに苦しむ神

カイエ6 p395ms137 (OCSW6-2) Accepter la souffrance d'autrui, mais en tant que souffrance, ce qui signifie d'abord en souffrir~p396ms138

他者の不幸ゆえにこの世界の意味を認めることがせきないというイワンの言葉にたいして（このように語る時、イワン自身は自分がこの無辜の不幸の当事者とは考えていない。）

ヴェイユは、1 他者の苦しみを苦しみのままに受入れるべきであり、2 しかもそれは自分がまず苦しむことを意味すると考えている。

例えばカイエ6 p399ms142 (OCSW6-2) Dire comme Iwan Karamazov: rien ne peut compenser une seule larme d'un enfant. Et pourtant accepter toutes les larmes, ~イワンと同様に悲惨を悲惨と認識したうえで、しかしその悲惨を受け入れなければならない。カイエ6 p395ms138 (OCSW6-2) La conception~ヴェイユによれば、このことを可能にするのは、必然性という概念である。必然性を認識することによって自分の苦しみを受け入れることができるし、思考を通して自己を不幸な他者のなかに転移させることができるという。この場合の必然性の概念とはなにを意味するのだろうか？

カイエ6 p373ms108 (OCSW6-2) Dieu veut tout ce qui se produit au même titre~il veut la nécessité.

La volonté de Dieu ~Pour la connaître, nous n'avons qu'à constater ce qui se passe: ce qui se passe est la volonté de Dieu. すべてこの世で生じることは神の意志であり、しかも神はその出来事がすべて同じだけの資格をもって存在することをのぞんでいるという。それを神が必然性を望むと表現している。それは言い換えれば、小さな不幸を大きな調和のために、一部の人の苦しみを全体の幸福のために、不合理な手段を万人の納得する目的のために、犠牲とするのを正当化しないということである。小さな不幸も、一部の苦しきもそれが存在する以上、それを愛さなければならない。

必然性をこのように考えることで、自分の苦しきも他者の苦しきも受け入れるのが、憐み compassion (共に苦しむ) である。

カイエ6 p396ms138 (OCSW6-2) 神自身が、人間の悲惨が存在することを受け入れたにもかかわらず、人間の悲惨に憐み compassion を持った、つまり悲惨とともに苦しんだという。これは、論理的には逆で、「憐みを持ったにも拘らず悲惨を受け入れた」ではないかと思われるのだが、どちらにせよ、憐みの神、すなわち、無力なままに人間の悲惨が存在せぬようになんらかの関与をするのでなく、自分も共に苦しむ神という概念が重要なのである。

ヴェイユはしばしばカイエにおいてトュキユディデスの言葉「誰もが自分が操れるすべての権力を行使する」を引用しているが、この言葉がいうように、一般的に権力を持つ者は自分が苦しむのを避けるためにその権力を奪ったのであり、権力を持たぬとされている者に苦しきを押しつけるのだが、力を持つことを放棄し、人間の悲惨を受け入れた神はともに苦しむことで神たりうるのである。

3) 自己と他者をつなぐ神

2) で既に見た「自己の苦しきを受け入れることで思考によって自己を不幸な他者に転移させる」とはどのようなことだろう。

自己の不幸と他者の不幸の間に厳密な区別があることが、悪または不幸についてのヴェイユの思考の特徴なのだが、自己と他者はどのようにしてつながるのだろうか？

ヴェイユは、工場労働の経験を振り返り、不幸の経験について次のように語っている。やや長いがそのまま引用する。

「工場の生活で不幸というものに触れたことによって、わたしの青春は死んでしまっていたのです。それまでわたしは自分の不幸以外に不幸の経験がなく、自分の不幸は自分のですから重大なものとは思われませんでしたし、またそれは生物学的なもので社会的なものではなかったのです。半分の不幸でしかなかったのです。世の中に多くの不幸があることはよく知っていて、そのことに悩みましたが、長い接触によってそれを確認したことはなかったのです。工場ではだれの目にも、私自身の目にも、私は無名の大衆と一緒にいましたから、ほかの人々の不幸は私の体の中に、また心の中にはいりこみました。私をほかの人の不幸から切り離すものはなにもありません

せんでした。」（ペラン神父宛の手紙4）

工場労働の経験は、自由な労働の実現をめざして、つまり労働者自身の思考が彼の労働行為を統御することが可能であるような労働形態を模索するための体験であったのだが、理論を体験によって確認補強することにはならず、人間にとって自由はありえない、人間は本来奴隷としての存在であるという自覚を得た体験として理解されている。が、この手紙で見ると、もう一つの重要な意味——自己の不幸と他者のそれを重ね合わせることでできた体験——を持っているのである。工場で働く他の人々がヴェイユの不幸に共感したとは思えないので、あくまでも一方的なものだったのだが。

他者の不幸と自己の不幸についてヴェイユは次のようにも述べている。

不幸においてこそ神の慈悲 (*la miséricorde*) は輝くので、不幸の極致にあってもなお神を愛するなら、「もはや不幸ではなく、喜びでもなく、喜びにも苦しみにも共通の中心的で純粹で本質的な、感知することのできない何か、神の愛そのものである何かに触れるのです」これは、神の愛への確信を断言する言葉だが、その確信について、なにもわからなくなる唯一の場合があり、それは他者の不幸に触れる場合だという。（ペラン神父宛の手紙6）

人間のエゴイズムを省みれば、他者の不幸程人間が容易に耐えることのできるものはないといってもよいが、もし他者の不幸に本当に耐えられないことがあるのなら、それは、その他者に普通の執着以上の並みならぬ愛情を抱いている場合か、極度に正義感の強い場合だろう。

だからこそカイエには隣人愛の教えについての解釈が繰り返し綴られているのである。

例えば、カイエ6 p391ms131~p392ms134 (OCSW6-2) の断章の思考をたどると、

隣人を愛せ、そして神を愛せという教えは、同じ教えである。なぜなら、普遍的なものを照らし出して見ることによって自己の感受性を変化させること、あるいは自己の不幸や他者の不幸を人間一般の悲惨さの感情に変化させること、個別の不幸を人間本来の不幸とみなすこと、それらによって「肉体のなかに捕らわれている精神、肉体のなかに捕らわれている神の姿を読み取る」のだから。

これは、理解しがたい表現だが、要するに自己の不幸も他者の不幸も人間本来の不幸として受け止め、自己の内面を変化させることで、人は真の精神性に目覚め、それは神に直結しているということであろう。

4) 「注意」の機能

イワンの反抗が問題とされるもう一つの観点は「注意」である。

カイエ6 p398ms141~142 (OCSW6-2) *La révolte est de tourner les yeux. Ivan Karamazov. L'acceptation n'est pas autre chose qu'une qualité de l'attention.*

イワンが世界を受け入れるのを拒否するのは、人間の悲惨から目をそらすこと、気持ちをそらすことだという。

さらにカイエ7 p415ms 4 (OCSW6-2)には、カイエ6の末部の思索を簡潔にまとめた文章のあとで、イワンについて述べている。

「非現実への逃避。だがそれは愛による働きかけではない。泣いている子供は自分が存在していないと思われたり、自分が存在していることを忘れられたりするのを望んでいるのではない。」

不幸の最中にいる人は自分の不幸に目をむけてもらうことを願うのである。

カイエ7 p419ms 9 (OCSW6-2)「他者の不幸から視線を逸らす事なくそれをみつめること。眼の視線をそらすだけでなく、反抗やサディズムやどのようなものであれ内面的慰めなどによる注意の視線をそこからそらすことなしに」

このような「注意」は、事実としてまた物として存在してはいても、真の共感や愛やそれから生じるやむにやまれぬ献身の行為を受け取るのではない限り存在しているとはいえない相手（不幸の最中にいる人）に向けられるとき、その相手の本当の存在を造り出す注意 *l'attention créatrice* なのである。(ADp136)

神のみが、存在しないものを考える (*penser*) ことでそれに存在を与えることができるし、私たちは私たちの中に現存する神——精神性——によって不幸な人の中に人間性を考え出すことができる。

この、注意によって不幸のなかで神を通して自己と他者が繋がるという思考は、単に他者を認識するさいの人間心理について述べたものでなくヴェイユ思想の中核なのである。

参考

ヴェイユ全集6—2 Gallimard 1997 (OCSW6)

神を待ち望む Fayard 1966 (AD)

シモーヌ・ヴェイユノート (CSW)